

| | |
|------------------|---|
| Title | 河南省安陽郊外後岡・高樓莊兩遺跡發掘調査豫報 |
| Sub Title | |
| Author | 大給, 尹(Ogyu, Tadashi) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1939 |
| Jtitle | 史学 Vol.17, No.4 (1939. 7) ,p.139a(667a)- 157(685) |
| Abstract | |
| Notes | 挿繪:高樓莊遺跡上土排除作業 |
| Genre | Journal Article |
| URL | http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390700-0139 |



河南省安陽郊外高樓莊遺跡 A2號豎穴上土排除作業

河南省安陽郊外後岡・高樓莊兩遺跡發掘調查豫報

大 給 尹

- 一、序 言
- 二、遺跡一般
 - 1、位置及附近の地形
 - 2、遺跡状態
- 三、發掘調査
 - 1、發掘經過一般
- 四、遺 物
 - 1、後岡・高樓莊採集遺物一般
- 五、結 語

一、序 言

昨昭和十三年初夏、慶應義塾大學史學科に於ては、支那學術調査團を組織し、三班に別れて各々北支及び中支に、皇軍慰問を兼ねて、學術調査に赴いた。

本稿は、大山柏先生を班長とする北支考古學調査班の、河南省安陽（彰德）郊外後岡及び高樓莊に於ける發掘調査の概報である。復命報告は嚮に大山先生によつて、史學（第十七卷二號）に發表せられた所で

河南省安陽郊外後岡・高樓莊兩遺跡發掘調査豫報（大給）

（六七）

一三九

あり、調査研究の本報告は近き將來に上梓を期されて居るものである。又、北支班の旅行全般に亙る経過、感想の類は、同じく大山先生によつて、三田新聞、大阪毎日新聞、史前學雜誌(第十卷四・五・六號)等に於て既に發表された。又、塾に於ては、前後二回に亙つて北支調査旅行に關する公開講演が行はれ、第二回に當る講演(人類民族聯合大會特別講演)には當兩遺跡の發掘に關する概要が報告せられた。本稿に於ても亦、安陽に於ける發掘調査の概要のみを記して、本報告の豫報とする。

發掘し、將來せる遺物の整理も現在漸く緒に著いた許りの所であつて、遺物の種類、員數等未だ明確に爲し得ざる點も多く、又、今後遺物の名稱等にも移動のある可き事は豫め御斷りして置く。従つて、詳細は總て本報告に譲るものである事を御諒承願ひたい。

我北支考古學班の編成は、大山柏先生を班長とし、その助手として筆者が從ふことを得た。更に、東京發聲映畫の木村信兒氏を監督とし、撮影技師吉田勝亮、同助手八子治男兩君の三名より成る映畫班を加へた、同勢五名の一行である。

一行は、昨昭和十三年五月十一日神戸を出帆し、途中、大連、奉天、山海關、天津を経て、同月十九日北京に到着した。旅行計畫に基いて、大山先生は北京到着後直ちに安陽發掘の了解を軍に求められ、引續き廿日廿一日に亙り、種々の準備、手續等を行つた。

幸に、發掘旅行に關して、軍の好意ある了解許可を得、且、其筋の注意により、日程を繰上げて速に北京を出發する事となつた。依つて、五月廿二日北京より京漢線に便乗、石家莊に二泊、廿四日の眞夜中に河南省彰德驛に到着した。

我々は翌廿五日より、六月十一日迄彰德に滞在し、其十八日間、一行は城内の五省ホテルを宿とした。目的地到着早々、軍及び河南省々政府等に、發掘調査の了解を求めた所、孰れも快く許可を與えられた上、殊に〇〇部隊は、我々の滞在發掘中、トラックの便乗を許され、又〇〇部隊よりは警乗兵を附與される等、各方面の一方ならぬ好意に接した。平時ならいざ知らず、事變下に於て、後方とは雖も戰地に於いて、豫期せるよりは遙かに大なる効果を納め、旅行の目的を充分に達し得た事は、偏に軍並びに機關及び省政府等より大なる好意を寄せられたからである。本稿を草するに當つて、御世話になつた方々へ深く謝意を表する次第である。

二、遺跡一般

(1) 位置及び附近の地形

後岡及び高樓莊の兩遺跡は、河南省安陽縣安陽（彰德）の西北の郊外にある。安陽は現今では、彰德と呼ばれてゐるが、舊名の安陽の方が通りが良いし、又、彰德の發音が滿洲國熱河省承德と同じであつ

て、混同され易い嫌ひもあるので、便宜上、本稿では安陽の名を用ひる。

安陽は、北京より南々西約四五〇軒（直線距離）にあり、安陽縣の縣城であつた所であるが、郊外の小屯が殷墟として有名である爲めに、考古學上では、安陽即殷墟として通用してゐる程である。安陽の位置について、更に蛇足を加ふるならば、北京より太行山脈の東側を、京漢線に依つて南下すれば、やがて、山脈を横切つて東流する黄河に達するであらう。これより先に、山脈はその尾を少しく西へ振るが、このあたりで、山西、河南、河北の三省が相接する。河南省は、その境界線を黄河より遙かに北へ狭く伸ばして、山西、河北の兩省の間に楔形に割り込んでゐるが、此三省が相接するあたり、河南省の北端近くに、安陽は存在する。であるから、西方は直ちに山地であり、東は遠く黄土の平原が續くが、その平原を縫つて、東流する小さな洹河（安陽河）の南岸に臨んでゐる。

小屯（殷墟）は、その安陽の郊外、街より西北約五五〇〇米、洹河の南岸に位するが、後岡及び高樓莊は、小屯と安陽の中間、同じく洹河の南岸にあつて、安陽の城内より西北約三〇〇〇米、京漢線の鐵路の西方僅かに二〇〇米を距てる距離にある（挿圖第一）。

小屯（殷墟）は、周知の如く、世人の眼を驚かす遺物の豊富に出土した點で有名であると同時に、中華民國の手によつて、大發掘が行はれ、その報告（安陽發掘報告第一・二・三・四期）も發表されてゐるが、後岡の方は僅かに試掘が行はれた程度であつた（安陽發掘報告第四期梁（思永）後岡發掘小記）。此兩遺物は、同じく洹河の南岸であ

り、距離も約二四〇〇米を距てるに過ぎず、地形も又、酷似して居り、右の報告によれば、兎に角遺物も発見せられてゐる所から、我考古學班は、その後岡の遺跡を調査し、小屯との比較研究の基礎を求めんとする目的を持つてゐた。

(2) 遺跡状態

我々が始めて後岡の丘の上に立つたのは、五月廿六日の雨の日であつた。來て見て驚いた事は、後岡の極めてゆるい丘の上には、幅三米強、深さ一米—一米五〇の北面した散兵壕が馬蹄形に周らされて居り、あたかも、試掘用のトレンチ然としてゐた事である。尤も、中心を少し外れては居たけれども、後岡を概見する爲めには、極めて便利であつた。後岡より南方の高樓莊の部落の北側には、前者よりは更に大規模の對戰車壕——幅四米五〇、深さ約二米五〇——が長く作られてゐた。これ等は、南下せんとする皇軍に對して、支那軍が防備陣地として作つたものである事は明らかであるが、これ有るが爲めに我班は短時日の間に豫期せざる收獲をあげ得たと云える。

後岡は、北に向つて舌狀に突き出た岬の如く、洹河はこれを迂廻して東流する。後岡の西及び北の河岸は高さ約十二米の黄土の崖をなし、後岡は、東と南——高樓莊の部落へ向つて緩かに傾斜してゐる。

——後岡の最高所と、高樓莊部落との距離は約二四〇米有るのに對して、最大比高は約三米—四米に過ぎないから、むづくり小高いのみで、内地では岡の部に這入らぬ様な地形である(挿圖第二)。

箇處試掘坑を掘り、更に全地域に亘つて地區を設定し、各々の表面採集を行つたものである。

三、發掘調査

(1) 發掘經過一般

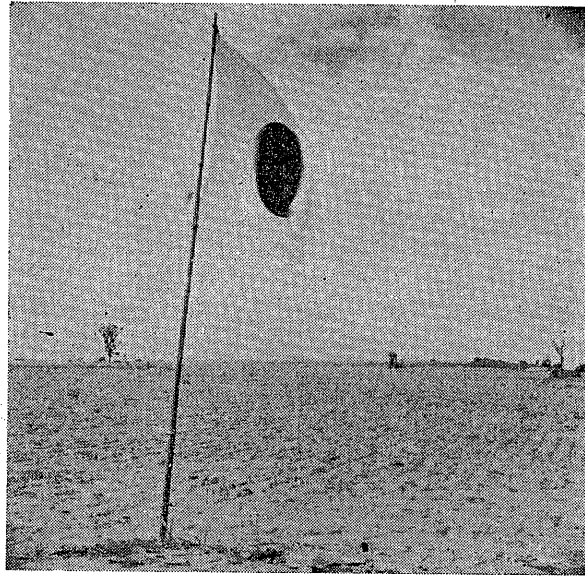
上述の如く、我班は安陽到着後直ちに、後岡の發掘調査、測量、映畫撮影に關して、軍並びに特務機關の了解を求めた所、快諾を得る事が出來た。更に、河南省政府にも同様の手續を踏み、了解を得たが萬一貴重品等の出た場合は地主等の納得の出來る様に處置して欲しいとの希望があり、調査には何なりと便宜を與える旨の好意に接した。

依つて、五月廿六日、我々は先づ後岡の現狀を豫察し、發掘地點等に關する具體的の計畫を樹て、翌廿七日には、省政府に對し人夫の斡施を依頼した。然るに、時あたかも、徐州陷落の祝勝祭が催され、省政府も多忙を極めてゐた際であつた故もあつて、其日より連日の如く人夫斡施の催促を爲したに關らず、一週間餘をも徒らに過して、六月五日に至つて始めて人夫を集める事を得た。

その間、我々は後岡全地域をA B C D E F Gの七區に分つて、各々その表面採集を行ふと同時に、映畫の撮影、測量等を開始した。然るに、表面採集の地域を次第に擴げて行つた結果、三日目の五月廿九日に至つて、前述の高樓莊村落の北側を周つて作られた對戰車壕壁に、彩燒土器〔後章參照〕を出土する豎

穴を發見するに到つたのである。

こゝに、我々は、後岡發掘の計畫を根本的に改め、以後、この高樓莊遺跡の發掘調査に主力を注ぎ、これに對應して、後岡の丘上に一箇處試掘を爲す事としたのである。



第二圖 高樓莊より北方後岡を望む

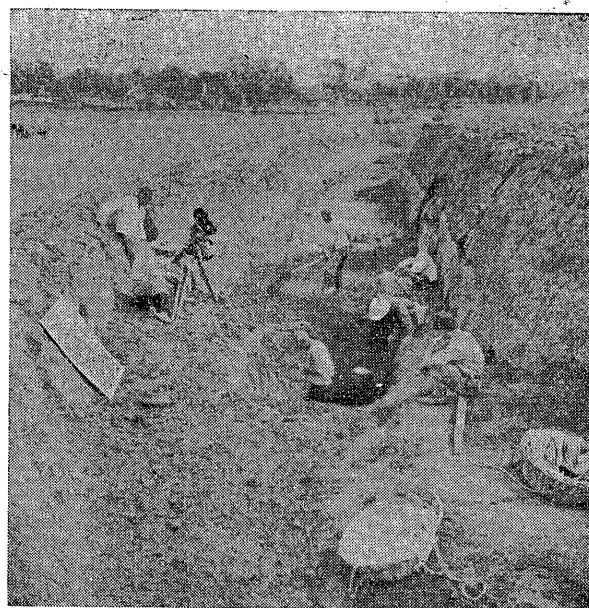
(2) 後岡K坑の發掘

後岡の地形及び遺跡状態は、前章に於て述べた如くであるが、上述の丘上に作られて居た散兵壕は、後岡遺跡を知るには有難いものであつた。壕を掘つた際に掘り起された遺物が、壕の内外に夥しく散布し、表面採集をするにも便宜であつたし、壕の壁面によつて、遺跡の性質を見、發掘地點を撰定するには、更に便宜であつたと云はねばならない。

散兵壕は、丘上の最高部を周つて、北向に大體（形を呈してゐるが、我々は便宜上此壕底を東南端より順次にA B C Dの四區に區分した。

散兵壕の壁面に現れた遺跡の断面は、決して截然とした地層等はなく、寧ろ混亂してゐるもの様に見受けられた。「後岡發掘小記」（安陽發掘報告第四期）に記されてゐる上中下の三層の如きは全く認め難い状況である。同書に「白灰面」と發表されてゐる、石灰様の薄層は或る箇處に於ては數段に層狀を呈し、

それが更に混亂してゐるのを見た。前記の、中華民國の二回に互る發掘の内、主要なものは、後岡の最高所を中心として大體十字形になる様に、長方形の豎坑を數十箇處掘つたものであるから、丁度この十字形の上方を圍んで孤形に塹壕が作られてゐたものであつて、この塹壕の掘られた部分の悉くが前回の發掘によつて攪亂されたものでは有り得ない。然るに、この散兵壕の内外兩壁面より見れば、この地域



第三圖 後岡 K 坑の發掘
(前方は高樓莊村)

は殆んど全部に互つて何時の時代にか攪亂されて居るもの、
如く、遺物が混在し、土壤も又混交してゐる。

けれども、その内、丘の最高所に當る部分 B 區・C 區は攪亂が甚だしく、低い方に向つてゐる A 區(東南端)及び D 區(西南端)は比較的攪亂されて居らず、その兩端近くに至つては、全く處女層であつた。即ち、後岡は、その最高所附近は、攪亂の度が甚しく認められる。

我々は、此外壕の(形の右肩に當る部分、即ち B 區との境に近い、A 區内の壕底を一箇所、更に深く試掘する事とし、約二米×一米五〇の長方形に、壕底より更に一米五〇(地表下約三米)を掘り下げ、純然たる黄土に達して、作業を中止した(挿圖第三)。

此發掘坑 K 坑よりは、後章に記す如く、人骨、銅鏃、貝貨其他の遺物を發見したのであるが、外壕内

外の表面採集の結果は、A區・B區は比較的遺物（主として原漢式土器〔後章参照〕）片の散布が少く、C區・D區には驚くべき多量の原漢式土器片が發見された。言ひ換えれば、後岡の最高所より西北及び西の方面に多量の原漢式土器の散布を見たのである。

又、茲に書き加えねばならぬ事は、後岡及び高樓莊の全地域に於ける表面採集、及び發掘に於て白陶及び黑陶と稱せられる兩種の土器は、全く一片さえも發見する事が出来なかつた。従つて又、前掲發掘報告中に、白陶、黑陶、彩陶の平面的分布區域を推斷し、圖示せられて居るが、これも、全く疑はざるを得ない次第である。

(3) 高樓莊の發掘

高樓莊の位置、地形等に關しては、既に述べた所であるが、此村落の北側に延々と掘り周らされた對戰車壕の内外兩壁面に彩燒土器の出土する豎穴の斷面が露出してゐる事を發見したのは、我々が始めて後岡に行つた日から四日目の五月廿九日の事であつた。最初の内は、此地方の治安の情態も解らず、後岡より餘り遠くの方へ獨りで歩き廻る事は危険に思はれた爲もあるが、表面採集に氣を取られ乍ら歩くにつれて、次第に遠方に行く様になつた事と、有名な白陶、或は黑陶の破片を見付け様と努力し、或は又彩色土器を採集せむとして、是等を懸命に探し廻る内に、此僥倖の發見に遇ふ事となつたのである。

高樓莊遺跡の發見も、全く支那軍の作つた對戰車壕のお蔭であつた。この對戰車壕の黄土の壁面に鮮

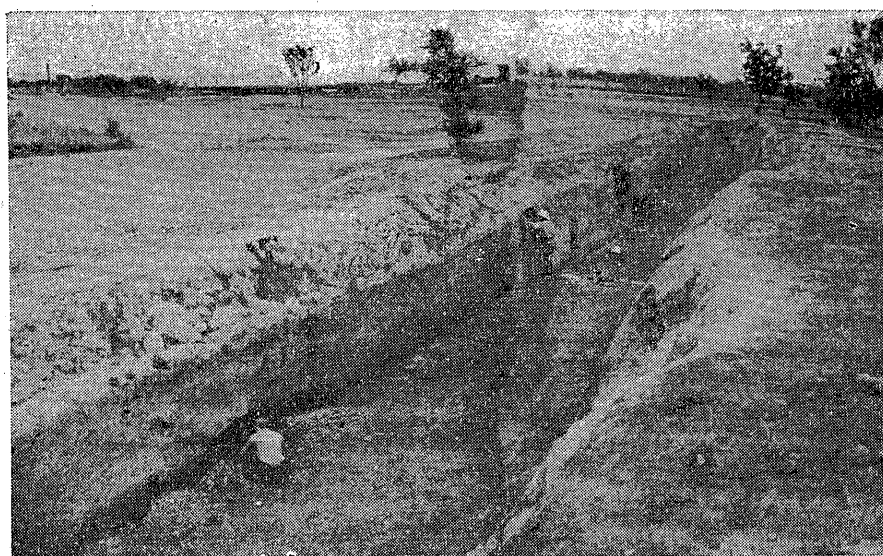
かに其断面を見せてゐる、總て十五箇の堅穴は正に壯觀であつたが、是を見付けた時の歡喜を我々は忘れ得ない。後岡は、散兵壕の壁面から察して、發掘するには、餘り芳しからざる情態であつた所に、高樓莊の

處女遺跡を發見したのであるから、直ちに發掘計畫を根本的に改めて此新發見の遺跡の調査に主力を注ぐ事としたのである。

高樓莊の對戰車壕は、幅約四米五〇、深さ約二米五〇、東は京漢線の鐵道の向側から、之を越えて高樓莊の村落の北側を走り、更に彎曲してその西側へ周らされて居る。其全長の内、堅穴の發見せられた區域は、その西部に當る、後岡に面する村落の北側のみであつた。

我々は、對戰車壕の北側壁面に九箇の堅穴を見出して、これを東より西へ順次に、A1號—A9號とし、南側壁面の六箇の堅穴も同じく東より西へ順次に、I1號—I6號と命名した。

その内、彩燒土器を主として出土するA2號と、之に對應して、原漢式土器を主とするA7號との兩者は、人夫を使役して



第四圖 高樓莊對戰車壕（東北方を望む）

左端人物の居る所はA9號堅穴
中央人物は鬲發掘中の大山先生

充分に發掘調査し、他は試掘の程度で中止した。

以上の他、同じく對戰車壕の北側壁面に於て、A 8 號と A 9 號との中間位置に於いて、表土下約三〇糎の高位置に發見せる數個の鬲形土器を完掘したのである。

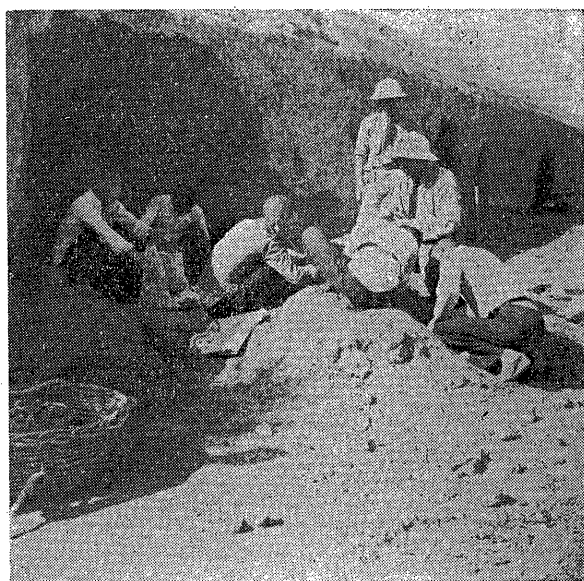


第五圖 A 2 號豎穴斷面 (發掘前)

の平面的位置にも何らの偏りなく、兩者が混在し、且、其輪劃は孰れも整齋であつて、重複してゐる如きものは一つも見當らなかつた。

この附近の耕土及び壕の内外の積土中には遺物が多量に散在するが、之等の豎穴の四周及び上下共全く黄土の處女層であつて、この黄土中には、云ふ迄もなく、遺物は認められない。

在し、多少の高低は認められるが、その豎穴の位置の高低と、出土土器の種類とは何らの關係がない。又其豎穴の平面的配列と土器種類とも何らの關係がない様である。即ち、彩燒土器を主とする豎穴と、原漢式土器を主とする豎穴とは、層位的に何らの差も認められず、孰れも黄土層中の略同一レベルに掘り込まれて居り、其形に就ても兩者共同しく、高約一・五〇米位、直徑約四・五〇米位の椀形乃至、三日月形に、黒褐色土、灰、炭、燒土の類が層狀をなし、この内に各種遺物が存在する(挿圖第五參照)。又、そ



第六圖 A7號豎穴と發掘品包裝作業

以上を綜合して考ふれば、本來は後岡にも亦、高樓莊の豎穴と殆んど同様のものが多數に存在してゐたものであらうが、それが攪亂され、其遺物も亦散亂したものの様である。是を以て見ても「上中下の三層」及び「平面的分布地域」等と發表せられた前掲の發掘報告の如きは頗る怪しげの物で、斯かる事實は全く認める事が出来ないものである。

四、遺物

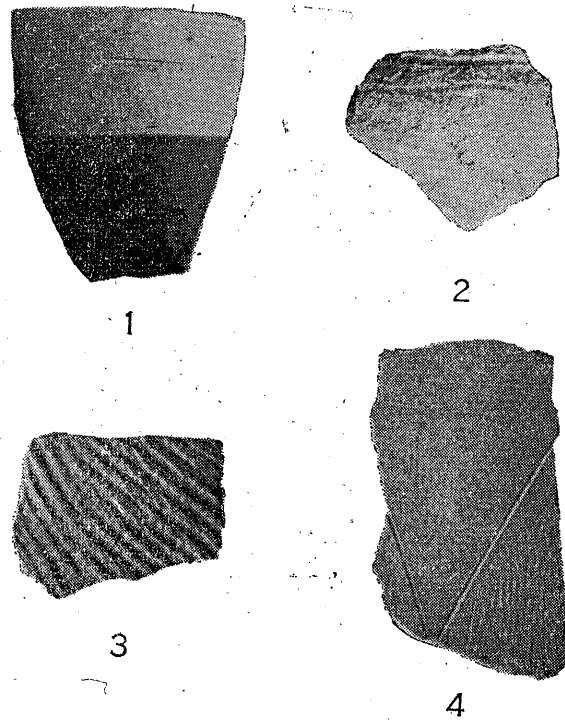
(1) 後岡・高樓莊採集遺物一般

後岡及び高樓莊の兩遺跡に於いて發掘し又は表面採集せる遺物は、相當多量にのぼり、輸送の爲め包装せる結果は、四打入ビール箱十三箇となつた。之を遺物包装の袋の數で云へば、手拭半打大の袋で總數六十七箇である。

今、茲に遺物の各種各箇に就ての記載は爲し得ない。既述せる如く、目下、是等の整理最中であり、従つて個數も明記し得ないから、其大要を掲ぐるに止め、又、遺物の名稱に就ても、今後本報告發表の節と差違が生ずる事も有り得るから、其點は豫め御含み置き願ひたい。又、整理進行と共に、新に遺物

を發見する事も有らうから、本報告の際と種々の點に異動が生ずべき事も御承知置き願ひたい。

土器は、茲では便宜上大別して、三種として置くが、茲に假稱せる各種の名稱と其特徴の大要を記して置かう。是も亦、假稱であるから今後、名稱にも又分類の上にも多くの異動があらうから御注意願ひたい。



第七圖 土 器 片

- 1. 彩燒土器片
- 2. 安陽式土器片
- 3. 4. 原漢式土器片

茲に云ふ彩燒土器とは、口邊が帶狀に赤く、以下が灰黑色——或は、全體赤、全體灰色のもの等も少からず——質は精堅、厚さ薄く、表面は研磨され、器形は主として椀形のもの(挿圖第七の1)。

彩色土器とは、右の彩燒土器の口邊に、豎に短い平行直線をセピア色又は黒褐色で數條畫けるもの、或は交叉紋を畫けるもの、及び器の内外に朱色を一

面に塗抹せるもの等であるが、數量は極めて少い。

安陽式土器とは、色は灰、質は粗、貝殼細片を多く混入し、厚さ中或は厚、表面平滑、無紋、又は横に數條の平行隆起文を有し、器形は鼎等(挿圖第七の2)。

原漢式土器 (Proto-Han type) とは、灰色或は黒、質は精にして堅、肉は厚く、繩紋又は無紋、一見

内地の須惠に似、器形は壺、甕、其他。此種は更に數種に別けるべきものであらうが、茲には原漢式土器の名を以て綜稱して置く事とする（挿圖第七の3、4）。

次に特に記して置くべき事は、各堅穴の土器は、彩焼土器或は原漢式土器の孰れかを主とするが、詳細に見れば出土量には多少の差はあれ、各種相互に混在してゐる。例へば、彩焼土器を主とするA2號堅穴に於ては、安陽式土器は可成り多く認められ、原漢式土器も極めて僅かながら混じてゐる。A7號は原漢式土器が主であるが、僅かながら彩焼土器を混じ、安陽式土器も數片あるといふ工合である。

青銅器は、全調査採集を通じて、僅かに銅鏃一箇を後岡K坑より發掘し、A7號堅穴より青銅器の痕跡を認め得たのみであるが、彩焼土器を主とするA4號堅穴よりは饜餮紋のある熔范の如きものを發見した事は注目すべきである。同じく彩焼土器を主とするA2號堅穴よりは骨角器、石器を多量に發見し原漢式土器を主とするA7號堅穴もA2號同様、骨角器石器等を出土したが、員數は比較的少い。A7號堅穴は獸骨類は極めて多く、占卜用の龜甲十三箇餘、卜骨十片を發掘した事は特記すべき事であるが孰れにも文字は認められない。

A6號、後岡K坑、及びA8號西方冨中の三箇處よりは、各々人骨を採集した。A7號堅穴からは、犬其他の小獸類、鳥類、魚類の骨も可成り多量發見した。A7號、A2號等より、牛類の極めて大型の骨骼を發見した事は、内地の遺跡に慣れた眼には稀しく思はれた。

五、結語

昨昭和十三年五月より六月にかけて約半月の間、河南省安陽郊外後岡及び高樓莊兩遺跡に於て、慶應大學北支考古學班の行つた發掘調査の概要は、以上四章に亙つて、述べ得た積りであるが、もとより杜撰な豫報に終る事を悔むものである。前述の如く此の本報告は遠からず發刊を期されてゐる所であるから、詳細は之に依つて御承知願ひたい。

本稿を終るに當つて、上記述せる所を更に一應茲に纏めれば次の如くである。

後岡及び高樓莊兩遺跡は、小屯（殷墟）と同様、河南省安陽縣城の西北の郊外にあり、共に洹河の南岸に臨み、小屯と相距る事約二四〇〇米、安陽の西北約三粁。後岡は殷墟と同様に、洹河の南岸に臨む低い丘であり、これに南接して高樓莊部落が在る。後岡遺跡と稱するものは、後岡丘上の殆んど全地域に亙つてゐるが、其最高所には北面して作られた支那軍の散兵壕が在つた。この壕は、支那側の前述の發掘が、丘の最高所を中心に十字形に爲されたに對して、最高所の周圍を孤狀に周つて作られたものである。後岡K坑とは、此の散兵壕の東端に近い所の壕底を更に深く掘り下げて調査した發掘地點名である。

高樓莊遺跡は、後岡に南接する同名の村落の北側に、延々と掘に周らされた對戰車壕に依つて、新ら

たに我班の發見せる遺跡である。即ち此壕壁に十五個の堅穴——北壁に九個(A 1 號—A 9 號)、南壁に六個(I 1 號—I 6 號)を發見したのである。我班は其内、A 2 號を完全に發掘し、A 7 號はその三分の二位を發掘調査し、他は試掘を行つた。更に、A 8 號の西方、A 9 號との間の壕壁に發見せる數個の鬲形土器を完掘したのである。

A 2 號堅穴は彩燒土器を主として出土し、A 7 號堅穴は原漢式土器を主とする。他の十三個の堅穴も此種土器の孰れか一つの土器を主として出土するが孰れもA 2 號、A 7 號同様黄土層中の殆んど同一レベルに、明瞭に半月形或は半圓形を爲して並んでゐて、上下の層位的配列は全く認められない。又、これ等兩種の土器を各々主として出土する兩種堅穴の平面的配列にも亦、偏在を認め得ない。更に土器型式別に依つて見るに、各堅穴は彩燒土器或は原漢式土器の孰れかを主としてはゐるが、純粹に一種類のみを出土する所はなく、各種共に僅か乍ら混在してゐる。而も、之等の各堅穴には後世の攪亂の跡は全くない。

各遺物に就いて見るに、石器類では、彩燒土器の堅穴からは、多量に大理石製無孔石庖丁片(厚く、磨製。刃部は打裂せるものあり)を出す事は一つの特徴である。骨角器類は、原漢式土器を主とするA 7 號にも有るが、彩燒土器のA 2 號に於て遙かに多く發見した。獸骨、鳥骨、魚骨の類は、A 7 號からは極めて多く發見したが、A 2 號にも尠くない。A 7 號の特徴は、占卜用の龜甲十三個餘、卜骨十片が

折重なつて出土した事であるが、孰れにも文字は刻されて居らず、又、他の堅穴からは一片をも發見して居ない。

金屬器類は、高樓莊遺跡に於てはA7號堅穴に於いて青銅器の跟跡を認めたと過ぎず、後岡K坑に於ては、人骨の附近より銅鏃一箇を得たのみである。けれども、A7號の卜龜骨の背面に穿たれた穴の如きは、金屬器に依つて作られたもの、如く、又、彩燒土器のA4號より、饗餮紋のある熔范の如きものを發見してゐる事は注目すべきである。

以上を要するに、後岡丘上は、各時代の遺跡が重複して居て、可成り混亂せるもの、如く、中華民國の前掲發掘報告の記載の如く、上より白陶、黑陶、彩陶の順に三層の文化層を認め、更にその平面的三文化圈を推定せる如きは、全くの誤である。我々は、此地に於て、白陶、黑陶の兩者は、一片さえも採集し得ず、高樓莊遺跡に於ても全然發見し得なかつたのである。

高樓莊遺跡は、是に反し全くの處女遺跡であつて、後岡に於ては詳かならざりし事實を明瞭に指示してゐるものと云はねばならない。

然れども、茲に、後岡遺跡、高樓莊遺跡と稱する兩遺跡は、全然別個のものではなく、可成り廣範圍に亙る同一遺跡の兩地點を爲すものである。只この遺跡の中、後岡丘上（後岡遺跡）は攪亂の度が甚だしく、高樓莊村落附近（高樓莊遺跡）は全くの處女遺跡であつたのである。

高樓莊に發見せる各豎穴の發掘、調査の結果より見れば、彩焼土器の方は、石器時代の終末乃至金石併用時代の文化相を示し、原漢式土器の方は、金石併用時代乃至青銅器時代の文化相を示してゐる。然れども、茲に「文化相を示す」と云ふのは、決して「石器時代終末乃至金石併用時代」の所産である等と申すのではない事を御斷りして置きたい。従つて、彩焼土器が古く、次いで、原漢式土器が來る等と云ふものではない。先に述べた如く、この兩種土器の各々孰れかを主として出土する點に於いて二種に別け得られる十五個の豎穴は、その孰れもが、層位的にも又平面的にも、全く何等差違を認め得なかつたものである。今假に、異なる系統の兩文化が、時間的に短い期間内に、同一個所に於いて、相接して存在する事も亦可能である點を考ふるならば、單に時間的差違をのみ思ふべきではあるまい。

この豫報に於いて、筆者はこれ等の點に就いて斷言するものでない事は充分御承知願ひたく、又、直接に所謂殷墟に何等かの關係を結びつけんとするものでもない點を誤解なき様に切望するものである。